

『東方』二九一号より

中唐というエポックを 生きた詩人たち

詹 滿江(杏林大学)

何の脈絡もなく「チュウトウ」と聞けば、世の中の大抵の人は中唐問題のことだと思うであろう。しかしながら、実は中国文学史における「中唐問題」もなかなか難物なのである。

従来、中国文学史の上では、明の高頼以来、唐詩を「初唐」「盛唐」「中唐」「晩唐」の四期に分かつことが当たり前のように行われてきたようだけれども、著者はまずこの画期の考え方の変遷を明らかにすることから着手している(第一部・大暦から元和へ／第一章・大暦から元和へ——「中唐」の文学史の意味)。内藤湖南は中国の歴史を「上古」「中世」「近世」の三つに分け、唐から宋への、すなわち「中世」から「近世」への変化が最も大きいと考えた。近頃、歴史、思想史の方面から、その変化の時期をさらに溯って「盛唐」から「中唐」へとする傾向がある。そうした動きから見ても「中唐」という時期を考える意味は大きいが、著者はそうしたいわゆる「時間区分」だけでなく、「中唐」には文学独自の「体格区分」としての意味もあると述べる。南宋の嚴羽は「中唐」という区分は言わず、「大暦体」「元和体」と言って、詩体・詩風の区分とした。著者は先行詩論を整理し、「中唐」の中にも大暦から元和への詩風の変遷があるとし、その変革しつつある流れを動的に捉えようとしている。なるほど「大暦」も「元和」も所詮は年号、やはり「時間区分」ではないかと言われそうだが、問題なのは区分の

赤井益久著

『中唐詩壇の研究』

A5判・五九二頁・創文社・一一、五五〇円



種類ではなく、「中唐」という時期そのものがエポックと考えられるということなのではなからうか。安史の乱のようになわたりやすいエポックは、歴史的時間の規模からはタイムポイント(時刻、時間の断面、いわば静止画像)として捉えられるものだが、「中唐」という変化しつつある時期は、タイムインタヴァル(時間の長さ、動画、すなわちこれが変容の中身)としてのエポックと捉えてもいいのではあるまいか。いずれにしても、著者は「中唐」を後の唐宋詩の区分の先河と位置づけ、その文学史の意味を明確に示したのである。

本書の論考の鍵を握る詩人は、韋応物であろう。韋応物は若いころ玄宗の侍衛として仕えたが、安史の乱後は失職し、節を折って読書した。すなわち、詩人としての韋応物は中唐の初めに属する。著者は韋応物が白居易に与えた影響を明らかにし、「大暦」から「元和」への流れを具体的に

▼『東方』291号より

一 中唐というエポックを生きた詩人たち

▲ 詹 滿江

示す。詩を作るようになった韋応物は、仕官と居を繰り返して、「比興」を有する歌行と「高雅閑淡」な五言詩とを詠じた。それらは後の白居易にとって、前者は諷諭詩に、後者は閑適詩に相当すると受け止められ、文学における〈兼濟〉と〈独善〉の二元性の先蹤と見なされたのである(第Ⅱ部・韋応物と白居易／第一章・韋応物と白居易)。

ただし、韋応物の歌行の諷諭性は安史の乱後の「折節」が契機となっていて、白居易の諷諭詩が左拾遺として仕官したことを創作の動機とするのとは相違すると指摘する(第Ⅱ部・韋応物と白居易／第二章・諷諭詩考——韋応物の歌行・雑体詩の影響を中心として)。この指摘は、一方は玄宗の近侍から地方官へ、もう一方は科擧及第から左拾遺へという全く逆のベクトルを明らかにしたものであり、これも時代の推移を物語る事柄として興味深い。

さらに興味深いのは両者の閑適詩についての論考である。陶淵明以来、官僚であり詩人でもある中国士人の処世の基本的具体的な方法の一つとしての「退隱」は、閑適詩の拠り所となる概念である。著者は、初唐における宮廷の社交の詩に見える山中(大抵は王侯貴顕の別墅)は〈擬似退隱〉を表し、その後、中唐の韋応物の〈郡内閑居〉詩へと変化し、さらに白居易の〈中隱〉へと継承されていく道筋を示す(第Ⅱ部・韋応物と白居易／第三章・閑適詩考)。これは「退隱」の概念を新たに解釈しなおした行為と言える。なぜなら、本来、「退隱」の詩が詠じられる場所は〈隱居所〉でなければならなかったはずだからである。初唐詩の〈擬似退隱〉がことさらに山中であることを必要としたのに比べれば、韋応物の〈郡内閑居〉や白居易の〈中隱〉はまさに画期的な「退隱」の方法であろう。著者は韋応物の〈寺院詩〉や〈郡齋詩〉の多作に注目し、もはや陶淵明以来の「退

トップページにもどる

隱」の概念には収まりきらない新しい概念が生まれつつあったことを説く。詩人の内省を促し、だれにも侵犯されない詩人だけの独自の世界が保たれるならば、そこが小宇宙であり、「退隱」が実現する場所となる。外界において「仕官」していようがいまいが関係なくなるのである。ならば、場所は〈隱居所〉でなくてもよく、寺院でも郡齋でもよい。ここに、初唐の宮廷詩人でもなく、盛唐の漂泊詩人でもない、中唐の官僚詩人誕生の経緯を見ることができよう。

韋応物から白居易へと受け継がれた、詩における「諷諭」と「閑適」という二つの流れは、白居易以外の詩人について見ると、もっぱら「諷諭」詩の継承に偏っているようである。白居易の親友元は「閑適」詩には関心が向かわなかったらしく、もっぱら政治批判の詩を重視した。著者は元白の新樂府「上陽白髮人」を例にとって比較し、元の作が為政者や官僚に向けての「諷諫」を狙いとし、人妻を無理やり後宮に連れ去る花鳥使を詠じ、直截的な政治批判を表現しているのに対して、白居易の作は、上陽宮に幽閉された老いた宮女を描くことで婉曲に政治批判を匂わすにとどまり、衆庶に道理を説き、迷謬を論ず働きをも有する「諷諭」を目指していたと述べ、両者の相違を浮き彫りにしている(第Ⅲ部・諷諭詩の系譜／第一章・中唐詩壇諷諭詩の系譜)。白居易らの新樂府の他に、張籍と王建の樂府もまとまった数が増えられており、著者はそれらを主題別に分類整理し、張籍の樂府の特質として、被支配者である民衆の立場に立った諷刺を込める作詩姿勢であったことを指摘する。また、王建の樂府の特質としては、民衆の生活や日常些事、女性の暮らしを描くことに好尚を示し、張籍よりも諷刺性は薄いと述べる(第Ⅲ部・諷諭詩の系譜／第二章・張王樂府

論)。なるほど王建は、宦官王守澄との逸話から見ても、「諷諭」を志向していたように思えない。大和年間に王守澄は死を賜り、王建は左遷されたが、両者命運を共にしたのではないかとつい臆測を逞しくしたくなるのである。

晩年の白居易と交遊した劉禹錫は、官僚になつてまもなく永貞の改革に失敗し、長い期間の貶謫を経験している。著者は、主に劉禹錫の寓言文学を取り上げながらも、同じく貶謫された柳宗元のそれをも含めて、同じ元和期の李紳・元・白居易の新楽府運動に対比して捉えられるべきものであらうと述べる(第IV部・謫遷と文学／第一章・劉禹錫の謫遷と文学——朗州司馬期の寓言文学を中心に)。すなわち、劉柳の寓言文学と李元白の新楽府とは、政治批判であるという点は共通しているが、政治的立場の相違によって、それぞれ文学における表現は違ってくるということであろう。諫官としてならば諷諭詩によって為政者に積極的に働きかけられるが、貶謫された立場ならば寓言によって韜晦するしかない。また、政治志向の文学ジャンルとしての対比の他に、貶謫という境遇を共通項とする対比もある。劉禹錫と同じく貶謫を経験した白居易の方は寓言文学を志向せず「閑適」詩を作ったことも好対照を示している。著者は両者のこうした相違を「劉白唱和」の応酬詩の中に見出し、白居易は官途の遇不遇を「命」と捉えるが、劉禹錫は自身の選択した改革の正当性に自負があるゆえ、それに肯うはずもないと述べている(第IV部・謫遷と文学／第二章・劉禹錫の賦について)。詩中の微妙な表現から得た感触であり、著者の洞察力には瞠目させられる。

官途の不遇といえ、苦吟で知られる孟郊もその典型であるが、孟郊は従来、韓愈との関わりから論じられることが多く、ともすると十七歳年少だった韓愈の弟子と誤解さ

▶ トップページにもどる

れることすらあった。著者は、そうした誤解を招いた経緯を明らかにした上で、孟郊の足跡を丁寧に通じ、孟郊の五言古詩制作における復古の詩風は、貞元九年、二度目の科挙落第後の際に作った「石淙十首」あたりから自覚されはじめたと述べている(第IV部・謫遷と文学／第三章・孟郊論)。そして、孟郊がまだ応挙する前、皎然や韋応物との江南での邂逅が、おそらくはその後の孟郊の詩風に影響を与えたであらうとの著者の推測は、間接的にはあるが、孟郊と白居易とを結ぶ糸をも示唆していて、この時期の詩人たちの交流の一斑を窺わせる。ここでも韋応物の存在は重要な位置を占めていると言えよう。

著者は、この時期の詩人たちについて、互いの影響関係を踏まえつつも個別に考察し、それぞれの個性や特質を明らかにするだけでなく、詩人たちを全体(すなわち詩壇)として捉え、この時期の詩人たちがいかなる共通性を持つに至ったかという歴史的变化をも考察している。たとえば「吏隠」という詩語を取り上げ、初盛唐期には「吏」と「隠」とが併称され、「仕官」と「退隠」とが区別されて認識されていたが、中唐以降、「吏を隠と為す」という「仕官」と「退隠」とを区別しない認識に変化した過程を論じている(第V部・周辺からの照射／第一章・中唐における「吏隠」について)。この変化は韋応物の《郡齋詩》における「退隠」の概念の変化と呼応するものと言えよう。《郡齋詩》の歴史的变化についても第V部第二章に論じられ、他にも聯句と詩会の変遷や「意境説」をめぐる論考など、評価したい著者の創見は多い。

かくて、中国文学史における「中唐問題」は本書によっていよいよ解明されつつあり、もはや新たな段階に進んだと言えよう。著者の業績に衷心より敬意を表したい。